

# Effect of treatment modality and cerebral vasospasm agent on patient outcomes after aneurysmal subarachnoid hemorrhage in the elderly aged 75 years and older

井戸, 啓介

<https://hdl.handle.net/2324/4784450>

---

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : (c) 2020 Ido et al. This is an open access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License.

(別紙様式2)

氏名	井戸 啓介
論文名	Effect of treatment modality and cerebral vasospasm agent on patient outcomes after aneurysmal subarachnoid hemorrhage in the elderly aged 75 years and older
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場園 明 副査 九州大学 教授 笹栗 俊之 副査 九州大学 教授 筒井 裕之

### 論文審査の結果の要旨

申請者らは、高齢者と非高齢者のくも膜下出血患者において、くも膜下出血に対する再破裂予防治療法や脳血管攣縮治療薬が臨床転帰に及ぼす影響が異なるかどうかを検討することを目的として研究を行った。J-ASPECT Study Diagnosis Procedure Combinationのデータベースを解析した（2010年から2014年に579の病院でクリッピングまたはコイルリングを受けた17,343人を対象とした。）。患者を年齢によって2つのグループに分類（高齢者 [75歳以上]、n=3,885 非高齢者、n=13,458）し、それぞれの患者群に対する治療法と抗血管攣縮薬（塩酸ファスジル、オザグレルナトリウム、シロスタゾール、スタチン、エイコサペンタエン酸、エダラボン）の院内死亡率と転帰不良(modified Rankin Scacle 3-6)に与える効果について、多変量解析を用いて調査した。高齢群は女性が多く、意識障害や併存疾患があり、クリッピングや抗血管攣縮薬（オザグレルナトリウムとスタチンを除く）による治療を受けていない患者が多かった。院内死亡率と転帰不良率は高齢群で割合が高かった(15.8% vs. 8.5%, 71.7% vs. 36.5%)。脳動脈瘤コイル塞栓術は非高齢群では死亡率の上昇と関連していた(オッズ比 1.43、95%信頼区間1.2-1.7)が、転帰不良の割合は低かった(オッズ比0.84、95%信頼区間0.75-0.94)。一方、高齢群では臨床転帰に影響がなかった。複数の脳血管攣縮治療薬（塩酸ファスジル、スタチン、オザグレルナトリウム、シロスタゾール）で非高齢者と高齢者の間で死亡率に対して同等の効果が観察された。転帰不良率については、非高齢群では塩酸ファスジル、スタチン、エイコサペンタエン酸で減少効果を認めたが、高齢者では、これらの薬剤の影響は認められなかった。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。